

れにくい。そこで31足全例に手術を施行した。手術方法はアッテンボロー法（アキレス腱延長+後方解離+内反足底筋群切離）17例、後方解離+アキレス腱延長2例である。手術は生後3～11カ月の間に行なつた。手術後数回矯正ギプスを施行、その後デニスブラウン装具を装着し、歩行開始後は靴型矯正装具を装着し、矯正位を保持させている。

各症例につきX線像、足関節の可動域、ADLなどにつき検討を加え報告する。

### 37. 腰痛に対する Caudal-Block 法の治療経験

（第二病院・整形外科）

○上田 礼子・菅原 幸子・大野 博子・  
田辺 智子・市瀬 武彦・石上 宮子・  
須永 明・松木 孝行・峰岸 孝年

硬膜外腔注入療法は根症状を有する腰痛および坐骨神経痛に対して行なわれているが、手技上の問題、副作用の面で一般外来での施行は容易に行なえない難点があつた。そこでわれわれは昭和46年より、prone positionで仙骨裂孔より Decadron 2mg+ビタミン B<sub>12</sub> 500 $\gamma$ ～1,000 $\gamma$ +0.5%キシロカイン12～15mlを静注針にて注入する方法（Caudal Block法）を用いて、種々腰痛の外來治療を行ない、約70～80%の効果を認めている。

従来腰椎穿刺法による硬膜外腔法の効果は、注入するステロイドによる効果であるかどうかの疑問が持たれ、検討報告されているが、われわれの方法でも薬剤による効果、大量注入による圧の変化、大量局麻剤注入による麻酔の効果等の効果理由が挙げられる。したがって今回は、この Caudal Block 法を用い、各種腰痛疾患を A) 従来の注入薬剤、B) ビタミンB<sub>12</sub>+生食水、C) 生食水のみ、を全量15ml注入し、自・他覚的所見について検討した。

その結果、A、Bのグループでは、椎間板ヘルニアおよび根性坐骨神経痛に80%前後の効果が認められ、急性腰痛症においては、初回のみでも効果を認めたものがあつた。

Cグループにおいては、根症状のある者は数例に1～2日疼痛の軽減をみたにすぎず、ほとんど無効であり、急性腰痛症においては著効をみたものがあつた。

以上のごとく、硬膜外腔圧の変化による効果のみでなく、また薬剤によつても効果の差を認めたので報告した。

### 38. 乳癌治療の現況（第III報）術後化学療法の効果

（第二病院・外科）

○山崎 靖夫・坪井 重雄・梶原 哲郎・  
松村 功人・服部 俊弘・中田 一也・  
遠藤 久人・芳賀 駿介・尾崎 進・  
成味 純・岸 陽子・蒲谷 堯・  
高 興弼・井合 哲・市川 辰夫・  
佐藤 範夫

本学会第207、208例会において乳癌患者の統計的観察および手術術式と予後の検討について述べたが、本学会においては、われわれが行なつてきた術後補助療法としての化学療法についてその投与法、成績、および副作用について述べる。当科では昭和39年4月から昭和51年6月までに110例の乳癌手術を行なつた。そのうち5年以上経過した32例から5生率を検討してみると、Stage I 16例中16例（100%）、Stage II 5例中4例（80%）、Stage III 7例中2例（29%）、Stage IV 4例中0例（0%）で、Stage I、IIの子後は非常に良く、Stage III、IVは全く良くなかつた。次に化学療法を行なつた27例の5生率をみると、Stage I、II 98%、Stage III 38%、Stage IV 0%で、Stage II、IIIにおいて成績向上を認めた。

投与型式は 1) MMC 1mg/kg 大量衝撃療法20例、2) MMC 6～8mg 週1回大量間歇療法25例、3) 5Fu 又は FT 207、500mg を週1～2回単独療法20例、4) 療法14例である。またこれらの投与を行なつた後、維持UFC療法として5Fu 500mgを週1～2回投与したもの60例である。

これら各群の成績上の著明な差は認められなかつた。化学療法を行なつた79例の副作用をみると、白血球減少22例（23.5%）、Al-p上昇18例（19.1%）、低蛋白血症12例（12.8%）、以下栓球減少（ $5 \times 10^4$ 以下）、貧血、GOT、GPTの上昇などが主なものであつた。われわれは乳癌における adjuvant chemotherapy の効果を確認したが、最近では Immunopotentiator としての Levamisole にも注目し、少数例ではあるが試み、なお一層の効果を期待している。

### 39. 乳児健康診察と発達異常チェック

（リハビリテーション部）

○山形 恵子・藤本輝世子  
（日野田病院） 千島 和枝

産科担当医の悩みは、新生児期、乳児期を通じ、出産児が、正常に、健康に成長出来るかという点にある。

大都市や大病院の新生児室は、各専門医が協力診察し、異常発見、管理に万全を期している。一方、小都市の単科病院や医院では、地域の小児科医の数が不足し、乳